

## 1. 活動期間

2024年9月24日(月)8時30分～2024年9月24日(月)17時00分

## 2. 活動場所

避難所：珠洲市立大谷小中学校避難所 (石川県珠洲市大谷町1字78番地)

## 3. 石川県珠洲市の被害状況

【令和6年能登半島地震】(9月24日14:00現在 石川県庁第161報)

人的被害 死者：126人 うち災害関連死29人 負傷者：重症47人 軽傷：202人

住家被害 建物全壊・半壊・一部損壊：5,543棟、非住家被害5,899棟

【令和6年低気圧と前線による大雨に伴う災害に被害等の状況について】

概要：気象庁は21日午前10時50分、低気圧の前線と台風14号の温帯低気圧の接近を受けて石川県の輪島市、珠洲市、能登町に大雨特別警報を発表した。さらに、気象庁と国土交通省によると、21日11時、県内の10以上の河川で氾濫が確認された。また、輪島市、珠洲市、能登町は、21日午後1時までに、計約4万4000人以上に対して避難指示が出された。気象庁が観測した降水量は、輪島市では22日午前8時10分までの24時間で412ミリ、珠洲市では午前8時50分までで315ミリを観測したと発表している。石川県によると21日午後3時現在で、道路寸断などのため孤立している集落は、輪島市、珠洲市、能登町で計14地区56カ所であり、輪島市と珠洲市で確認された死者が計7人になったと発表した。安否不明者の数は、23日午後4時の時点で4人であった。(気象庁、国土交通省、石川県、NHK、東京新聞)

珠洲市被害(第6報 令和6年9月24日16:00現在 石川県庁危機管理監室)

死者1人 行方不明者1人 負傷者調査中 軽傷9人

住家被害 建物全壊・半壊・一部損壊：調査中

孤立集落：3地区11箇所55人

## 4. 避難所の状況

【避難者数】避難者数48名(男性18名女性18名スタッフ10名)

### 1) 大谷小中学校ライフライン状況

道路：国道249号(旧大谷道)の1本のみ開通していた。山道で、坂道が多く途中何カ所かの土砂崩れ後があり、車1台分がようやく通過できる箇所が多くあり夜間の通行は危険であった。

断水：飲料水の備蓄があったが、手洗い等の生活用水が不足していた。屋内・屋外トイレはビニール袋と凝固剤で対応をしていた。外の仮設トイレは捜索隊専用となっていた。

電気：9月23日20時に通電していた。それまで夜間は懐中電灯を使用していた。

通信：9月23日スターリンクが設置され、ライン等はずながっていたが、携帯電話は通じてはいなかった。テレビはケーブルテレビのみで、地上波は入らずリアルタイムでの情報入手はラジオのみであった。

2) 食事：1日2食となり、9時と17時におにぎりや汁物の提供があるが副食は缶詰めやインスタント食品等で賄われていた。食材も不足状態になっていた。

3) 生活環境：到着時の避難所内には、20名位の避難者と消防団員とリーダー、副リーダーがおられた。

玄関前は、圧縮された泥がつもり、風が吹くと砂埃が舞っていた。玄関内も泥が乾燥されて真っ白になり、玄関から体育館内までの茶色いスリッパも泥で汚れていた。体育館内も歩くたびに砂を踏むような足音がしていた。大雨で新しく加わった避難者は、体育館の奥のブルーシートの上に布団を並べ、6人位の女性高齢者が座っていた。

## 5. 支援活動の実際

### 1) 避難所被災者の健康管理

15名に血圧測定を行い、内服の有無や健康状態の確認を実施した。14名の値は正常範囲内であった。残り1名の80代女性の方が「避難時に薬を持ってこなかった。2日内服していない。1種類はもうなくなっているのがある。何がないのかわからない。取りに帰る。」と言われたが危険な地域の可能性もあったため、近くに住んでいる男性に声をかけ、一緒に連れて行ってもらうことになり薬を持ってこることができた。そこで、この方の薬剤情報を元に不足分の内服を確認した。珠洲市健康増進センターに連絡し通院先の病院にて処方依頼し、午後から訪問する日本赤十字金沢チームに持参してもらい不足分の処方を渡すことが出来た。

睡眠状態は、夜間時々覚醒し熟睡はできていない状態であった。覚醒していた理由としては電気が復活し、本部の電気が眩しかったことも挙げられていた。本部に夜間のライトを早めに落とすように伝えた。また、ブルーシートで横になっている方に段ボールベッドの打診を行ったが、「床は冷たくて気持ちがいい。特に不便ではない。ベッドは必要がない。」と言われていた。

保清面では、着替え等は本日家まで取りに行く方がほとんどであった。シャワーの利用が出来ず、ドライシャンプーや身体拭きタオルで代用していた。

精神的な面では、困り事を問うと、「特に困っていない。自然が相手だから仕方がない」「地震よりもひどい」という言葉があった。中には、泥に身体が半分埋まり、消防に助けだされたが、次の避難所も土砂崩れの危険性があり違う避難所に移動した方がおられた。「命をあきらめたが助かった。今は、具合悪くはないが大丈夫ではない。」と大変な思いをされている状況が伺えた。

### 2) 避難所の不足物の確認

不足物資の確認を行った。生活用水、紙コップ、紙皿、割ばし、電池(単1~4)の希望があり、珠洲市に依頼した。電池はラジオで消費するとのことであった。昨夕に道路が開通したばかりであり、支援物資は少なく食料も不足していた。

### 3) 避難所の環境整備

4つの支援団体と、在駐の消防団の協力を得て大谷小中学校の環境整備を実施した。支援団体が2トンのポリタンク水を持参してくれたことにより、学校の玄関の土砂の撤去や仮設トイレの下の泥の撤去及び玄関のデッキブラシで掃除を実施した。また、玄関マット交換、住民スリッパの交換、体育館入口のブルーシートの撤去及び床の拭き掃除を行い砂塵撤去の徹底を図った。明日は住民エリアの掃除を計画し通知を行った。

## 6. 支援活動を通しての所感と課題

地震後、ようやく今後の生活再建について考え始めた矢先の豪雨被害にて、住民の心身のストレスや疲労ははるかに想像を超えるものとする。また、再度ライフラインが途絶した生活に戻り、受け入れざるを得ない現実に向き合いながら避難所生活で過ごしている様子が伺えた。水害の優先課題としては、粉塵による健康障害のリスク軽減が挙げられる。また、内服の有無や日々変化する健康状態の観察を継続することも重要と考える。災害関連死を防ぐためには、ライフラインの断絶や食料、物資の不足の情報を早めに把握して、対応する生活支援を展開する必要があると考える。しかし、一方的な支援にならないように被災者の複雑な心情をおもんばかり、言動に留意しながら寄り添う支援につながるように展開していきたいと考える。

課題としては、館内は、清掃をしてもすぐに粉塵化するため、毎日の清掃が必須である。支援者がいなくなっても、住民自らが環境整備を継続できることが必要である。精神面では、傾聴する中で心身のストレスの軽減や可能な生活支援に繋げることや、今後の生活再建の為に、市の方針などの情報を正確に届けることがあげられる。

## 7. 写真



泥除け作業



スリッパの履き替えゾーン